

博士学位論文（要約）

近世儒学における〈日用〉の思想化
—日常の営みと学問をめぐる言説空間の生成と展開—

李芝映
京都大学大学院教育学研究科
2013 年

*論文のキーワード

近世思想史、近世教育史、「日用」言説、伊藤仁斎、浅見綱斎、貝原益軒、三輪執斎、五井蘭洲、含翠堂、懷徳堂。

*論文の章立て

序 章	日常の営みと学問—近世儒学の新しい視座
第一章	元禄期京都における「日用」言説空間の浮上—浅見綱斎の伊藤仁斎批判を通じて
第二章	元禄期上方における「日用」言説空間の展開—貝原益軒の伊藤仁斎批判を通じて
第三章	日常における学問的実践の問題—佐藤直方と三輪執斎の対立を通じて
第四章	近世中期における「日用」言説空間の拡張—五井蘭洲と荻生徂徠の比較を通じて
終 章	近世における民衆の儒学受容—日常の営みと学問

*論文要約

本論文は、近世日本社会における民衆の儒学受容を、儒者の「日用」言説を通じて考察した研究である。従来民衆の儒学受容に関する思想史研究は、近世中・後期を中心として行われていた。そして幕末に至っては「儒学の大衆化」と評価されるほど、儒学が日本社会に広がって浸透していたことが論証されてきた。しかし近世前期における民衆の儒学受容に関する研究は乏しいといえる。これらの研究は民衆の儒学受容を前提としたものの、儒者の思想が民衆の儒学受容のいかなるところに、いかにかかわっているかの考察は不十分だと考える。このように従来の儒学史・思想史研究には近世前期と中後期との隔たりが存在する。本論文は、近世前期から中期にわたって、儒学・儒者の側から民衆の受容の意味を明らかにする。それによって近世前期からの連続性のなかで、近世後期の儒学受容の拡大に関しても新たな評価ができるかと考える。

このような課題のために、「日用」言説という分析概念を用いて、儒者のテキストを考察した。「日用」とは『易経』を出典とする、日常的空間を意味する儒学の用語である。本論文が「日用」に注目するのは、民衆の「学問する」場がまさにこの日常であり、彼らが求めた学問が日常の営みときわめて密接な関わりがあったと考えるからである。そしてこの「学問する」民衆に相応して、自らの思想・学問を形成していた儒者たちは、この日常を射程に入れるようになるかと考える。儒者が、民衆の学問の場である、日常を自分の思想・学問の体系に入れて、変容していく過程を、「日用」言説を通じて考察した。本論文は儒者たちの「日用」言説が、民衆の儒学受容と相応関係にあると考える。

本論文は、「日用」言説への着眼から近世前・中期における儒者の思想的営みを解明することで、近世における民衆の儒学受容の意味をとらえ直した。すなわち「日用」言説が、日本近世社会における「学問する」民衆の登場に鋭く相応しながら、浮上・展開・拡張していく歴史的なダイナミズムを浮き彫りにした。